

第二章

詩集『春と修羅』の同時代的受容

土佐の詩人・岡本弥太の宮沢賢治理解

本稿の要旨は、岡本弥太という宮沢賢治と同時代を生きた土佐の詩人が、いかに卓越した賢治文学の理解者であったかを明らかにすることにある。そしてそれは、賢治研究ならば弥太研究の双方にとって意義のあることと考える。本稿では、弥太の賢治に関する三種の文章をもとに弥太の賢治理解を考察する予定だが、賢治研究者にとってそのうちの一つは未見のものであり、また弥太研究者にとってはそれは別の一つが未見のものと推定される。

周知のように、昨今の賢治研究の隆盛は目を見張るものがある。私はそれをそれなりに望ましい現象と考えるが、現在のように溢れんばかりの賢治情報に身を置く立場が、必ずしも賢治理解に最良の条件といえるかは疑問である。賢治を知ることがその人の生きる上での支えとなるような出会い、そのような出会いに情報の多寡は本質的な問題とならない。一冊の詩集に、一冊の童話集に賢治の全てが隠されていることもあるのである。弥太の賢治との出会いはまさにそのようなものであった。

一 岡本弥太とは

岡本弥太は、全国的にみれば一部の詩人や研究者にのみその名を知られる存在かもしれない。だが、土佐の地において弥太は「南海の賢治」と称される詩人で、郷土の生んだ最も著名な詩人であり、弥太祭や弥太賞といった催しも行われている。弥太は明治三二年一月、高知県の岸本村（現、香我美町岸本）に生まれた。賢治が明治二九年八月生まれであるから三歳年下、学年としては二級下にあたる。弥太は高知市立商業学校を卒業、その後一時神戸に職を得るが、二三歳の時郷里に戻ってからは終生土佐の地を離れることなく、二〇年にわたり小学校教師としてその職を尽くし、昭和一七年一二月、結核によって満四三歳の生涯を閉じた。四一歳で校長となったが死は僅かその二年後であった。

詩人としての弥太の活動は、大正一二年（二五歳）の同人誌「ゴルゴダ」創刊に始まる。この年は小学校代用教員として職を得た年で、幾つかの同人誌を経た後、昭和五年（三二歳）頃から本格的な活動期を迎える。全国的な詩誌である「詩神」（編集・宮崎孝政）

や岡山の間野捷魯が主宰する「たてがみ」への投稿、掲載が続ぎ、それらの詩篇が昭和七年（三四歳）一〇月、第一詩集『瀧』刊行へと結実する。『瀧』は、序文・宮崎孝政、跋文・間野捷魯を得、岡山県の詩原始社から出版された。昭和八年からは「日本詩壇」（編集吉川則比古）誌上を中心にその同人として活躍。また、地元においても、詩誌「鸞」の編集や高知新聞「詩壇」の選者といった仕事に携わった。昭和一一年（三八歳）、第二詩集『山河』出版を企画しその予告を「日本詩壇」上に掲載したが、幾つかの事情から実現には至らなかった。没後のことになるが、中野重治編『日本現代詩体系』（河出書房、昭26・8）、伊藤信吉他編『日本詩人全集』（創元社、昭28・3）に弥太の詩が収録されている。また、これは弥太研究にとって新資料となると思われるが、弥太の詩は生前においてすでにアンソク

ジーに収められていた。吉野信夫編『現代日本詩集』（現代書房、昭9・5）と小川十指秋編『現代日本詩人選集』（動脈社刊、昭10・12）がそれで、これにより新たに当時の弥太の詩人としての位置を確認することができるだろう（資料提供は杉浦静氏による）。

紹介としては意を尽くしきれぬものだが、以上が弥太のあらましである。依拠した主な文献を次に挙げ、詳細はそれに譲りたい。『岡本弥太詩集』（岡本弥太詩集編纂委員会編、高知県文教協会、昭38・4）「年譜」、「後記」。堀内豊「弥太私抄」（高知新聞掲載記事、昭和51年4月22日～5月28日、計36回）。『岡本弥太詩集 灌篇』（山川久三監修、泰樹社、昭60・12）「年譜」、「解説に代えて」（執筆・嶋岡晨）、「あとがき」（執筆・山川久三）。『土佐の近代文学者たち』（岡林清水・木戸昭平・片岡文雄編、土佐出版社、昭62・4）「岡本弥太」（執筆・嶋岡晨）。

二 弥太の賢治関連文章

私が調べた範囲では、弥太は賢治に関して三種（整理の都合上、発表順にABCの記号を付す）の文章を残している。それは（A）「随想 宮沢賢治」（「榕樹林」第2輯、編集・高田晃、榕樹詩社、昭8・11）、（B）「宮沢賢治」へのノート」（『宮沢賢治追悼』編集・草野心平、次郎社、昭9・1）、（C）「春と修羅の我が思い出」（「イーハトーヴ」創刊号、編集・菊地暁輝、宮沢賢治の会、昭14・11）である。賢治の没年月が昭和八年九月二一日であるから、右の三種は生前批評ではなく、追悼・回想に当たるものである。

（A）の「随想 宮沢賢治」は、これまでの賢治研究では知られていなかった一文である。賢治没後約四〇日という早い段階で発表されたものとして注目に値するだろう。私がこの文章をはじめて目にしたのは『岡本弥太選集』（編集・島崎曙海、岡本弥太選集刊行会、昭23・1）という小冊子においてであった。高知高専の先任教授高橋正氏より借り受けたものである。初出の発表誌は「榕樹林」第二輯ということとその確認に手間取ったが、最終的には高知県立文学館のご協力によって確認することができた。

「榕樹林」は、本県香美郡山田西町（現、土佐山田町）の高田晃方に発行所を置いた、隔月刊の同人詩誌である。第二輯の発行は一月一日であり、そのためには、弥太の原稿が少なくとも一〇月初旬の段階で編集者に渡っていなければならないことになるだろう。同誌には原稿締切を発刊の一ヶ月前とする旨が記されており、多少の遅れがあったにしろ、弥太の執筆は賢治没後一〇日か二週間という時期であったと推定される。

ただ、一つ疑問が残らないわけではない。というのも、弥太は「榕樹林」同人ではなく、何らか編集者の求めに応じて寄稿したと考えられるのに対し、編集者である高田晃が、賢治の死後ただちに原稿を弥太に依頼し得るほど、賢治に関する情報を持つ立場にいたとは推定し難いからである。おそらく、そこには次のような経緯があったのではないか。同号を見ると、弥太は賢治の随想の他に「藤田文江」の随想を発表している。藤田文江は弥太と同じ「日本詩壇」や「鬘」誌上で活躍した鹿児島島の詩人で、その年の四月、急の病で亡くなっている。弥太は編集者の依頼により「藤田文江」の随想を準備していた。そこに賢治病没の知らせが入り、弥太は急遽賢治に関する随想の執筆を決意、「藤田文江」の随想と併せて発表した、という推定である。

(B)の「『宮沢賢治』へのノート」は、もつとも広く知られた弥太の一文であろう。掲載誌『宮沢賢治追悼』は賢治研究の嚆矢として名高く、後に、十字屋書店刊『宮沢賢治研究』（草野心平編、昭14）に全編が再録されている。現在においても比較的人手が可能な文献といえる。

(C)の「春と修羅の我が思い出」は、おそらく弥太研究者には知られていない一文である。後に詳しく記すが、「弥太年譜」における賢治関連事項は、この一文の弥太の回想と矛盾しており、年譜作成段階において弥太研究者の視野に入っていなかったことを物語っている。もつともそれは致し方ないことで、掲載誌「イーハトーヴォ」は盛岡在住の菊地暁輝を中心とした地方誌であり、発刊当時はともかく、その後は全く人手不能な文献となっていた。私なども、復刻版（『宮沢賢治初期研究資料集成』国書刊行会、昭62）において、初めて読むことが可能になったのである。

そこで、それぞれの本文の資料的価値を考慮し、その全文を以下に掲載することにする。また、次節「弥太の賢治理解」での便を考え、現時点までに調べ得たことがらを注として付しておく。なお、旧漢字は新漢字に改め、明らかに誤植と推定される箇所に関してもこれを改めた。

資料（A） 随想 宮沢賢治

たとへばここにわれわれ太陽系統の人間どもが全然知らなかつた別の宇宙^{こそふ}が、眼ざめきわの網膜にうつつてきたとしたら 故人宮沢賢治の詩集（春と修羅）はどのようにいままでの詩的概念で法則されない羽ばたきをわたしにいまでもあたらしく見せてくれる。そのような芸術はジョイスのごときのゐない日本にはいままでなかつた。恐らく亦こののちも詩において宮沢的な小宇宙（その名がかの人の詩にふさわしい）をみることはがたいのであらう。

流行^{はやり}や時に支配されない芸術といふものがあるであらうか。そうした疑問がわれわれの頭脳におこる場合にこの人の不思議な芸術は第四次元延長の世界のなかで何かの意味をこたへてくれる。ひよつとするとさうした絶体はあり得るかも知れぬといふことはあの自然科学をして力学をして光学をして最も高度に芸術生命流動の霊媒として役立てた（屈折率）以下の摩訶不思議の芸術に（或は複眼的宗教）とらへれた私のいちばん初めの感じであつた。

（すべてがわたくしの中のみんなであるやうにみんなのおののなかのすべてですから）

とかたつてゐるかの万法流転の法則へのたちろかないあの人の覚悟のよさ……

（×××××、さういふおかたは知らないのですから……）と、さる俗情界に有名である東京の詩人二三人が講演旅行の途次、肺患に呻吟する花巻町の詩人を訪ねたら、玄関で断られてしまつたといふ、うそらしいまことの話のある仙台の詩人が書いてきた。

宮沢氏からみると凡ては あらゆる透明な幽霊の複合体）くらいにしかみへなかつたであらう。私は間の抜けた旅行鞆の詩人たちの顔を考へてふきだしてしまつた。つねの詩人なら抱へあげるべき筈のところをすつぱりとやつてのける人は矢張り（春と修羅）の著者であらう。

岩手の母木光氏から随分の重態ときゝ、その後亦よほどお丈夫になりました　との便り
あつたがやはりあの人はいけなかつたのだ。

「私の全生涯の仕事は此の法華經をあなたの御手許に届け、そして其の中にある仏意に触れてあなたが無上道に入られる事をお願いする外何もありません」

岩手の彼人の友人たちから私のところへもきた通知のなかにあつた最後のことを、さながら自分にあてられたように感じてわたしはみた。（法華經）といはれる詩集のおくられる日が待遠しい。

（草野心平が代表で見舞に行つた）小森盛君から書いてきたてがみの表は、あの（春と修羅）における（小岩井農場）の広々とした牧場の群牛の写真であつた。向ふに、サガレンを思はす蕭条とした低い山脈が見える。

それよりもこんなせわしい心象の明滅をつらね

すみやかなすみやかな万法流転のなかに

小岩井のきれいな野はらや牧場の標本が

いかにも確かに継起するといふことが

どんなに新鮮な奇蹟であらう　（小岩井農場一章）

春と修羅は形而上下をつらぬく環状的因果律の連続模様だ。ある人には奇異にみへある人には二つとない經典とならふ。自分には書かれたといふ感情的なものより、測定された一つの宇宙といふ感じが深い。この尊い詩人を亡くしたことを悲しむほど、その損失を考へるほど日本の詩壇は敏感であるであらふか。それも良い。要するに宮沢氏のほんとの価値が認められることは彼の死によつて以外論ずる外のない只今の有情詩界のはかなさに住む一人の自分をも切に憐れむのみだ。

注

（1）《東京の詩人二三人》とは、白鳥省吾と犬田卯のこと。この逸話は『校本宮沢賢治全集』年譜に、大正二五年七月二五日の出来事として記されている。年譜は、賢治に頼まれ断りの使いに出た千葉恭の回想「宮沢先生を追つて（三）」（「四次元」第7号、昭25）に基づき作成されたもの。この逸話の出所に関しては、平沢信一が「大正ノ昭和初年の宮沢賢治評価　「詩神」を軸として」（「米子工業高等専門学校研究報告」第31号、平7）で考察しているが、当時の詩人達がどうしてその逸話を知り得たのか現在までのところ明らかでない。この弥太の一文により、当時の状況の一端を窺う手掛かりを得たことになるだろう。ここでは、弥太の残した「東京の詩人二三人」や「講演旅行の途次」の記述が、平沢が調査した「太平洋詩人」第2巻3号・4号（昭和二年三月・四月）での草野心平と白鳥省吾とのやりとりの中に見いだせない記述であること、また、「玄関で断られてしまった」の記述が、盛岡で白鳥省吾らに会つたという千葉恭の回想と異なっていること、を確認しておきたい。

手紙を書いてきた「仙台の詩人」とは誰であるか。仙台といえば、賢治と面識があり、かつ弥太とも詩誌「詩文学」（編集・中村漁波林）の同人として繋がりのある石川善助あた

りが想起されるが、鈴木信二や錫木碧などもそれぞれ賢治に関する情報を知り得る位置におり、弥太宛の書簡の存在が確認できない現在、不明とせざるを得ない。

(2)《母木光》は明治四三年生まれ、岩手県出身の詩人・童話作家で、賢治との間に書簡の往復があり、二度(昭和七年五月、八年八月)生前の賢治を訪れている。儀府成一の名で、賢治に関する二冊の著書『人間宮沢賢治』(蒼海出版、昭46)、『宮沢賢治その愛と性』(芸術生活社、昭47)がある。母木の名は資料(C)「春と修羅の我が思い出」にも見出され、母木経由で弥太に賢治に関する情報の伝わっていたことが確認できる。

(3)《私の全生涯の仕事は……》は、賢治の遺言の一部で、父政次郎が書き留めたもの。「岩手の彼人の友人たちから私のところへもきた通知のなかにあつた」と弥太が記しており、賢治の遺言が、何らか葬儀に際しての案内状等に印刷されていたのではないかと推定される。儀府成一(母木光)の『人間宮沢賢治』(前出)に、「多分その夜(賢治の亡くなった日 注鈴木)だつたと思うが、故人の先輩や知己友人に、いちおうの挨拶状はすでに刷りあがつて投函したあとだときいたが」とある。この点に関し、校本全集編集委員の奥田弘氏に照会したところ、問題の葬儀の案内状が最近発見され、そこには賢治の遺言も記されていたとのご教示を受けた。本資料は、現在刊行中の『新校本宮沢賢治全集 第一六卷(下)「年譜篇」に新たに収められている。なお、本稿で紹介した弥太の「随想 宮沢賢治」も新資料として同「補遺・伝記資料篇」に収録された。

(4)《法華経》とは、賢治の遺言にあつた『国訳妙法蓮華経』のこと。昭和九年六月五日、一千部が作製され、知人・関係者に配られた。弥太に届けられた『国訳妙法蓮華経』は、長女の瑠香(香美郡夜須町在住)さんのもとに現在でも保管され、そこには宮沢清六氏(賢治の令弟)のものと思われる筆跡で、「第七拾参ノ昭和九年六月ノ謹呈 岡本弥太様」と記されている。

(5)《草野心平》は明治三六年生まれ、賢治を広く世に紹介するに最も功績のあつた詩人で、賢治を「現在の日本詩壇に天才があるとしたなら、私はその名譽ある『天才』は、宮沢賢治だと言ひたい。世界の一流詩人に伍しても彼は断然異常な光りを放つてゐる」(「詩神」第2巻第8号、大15)と評してはばからなかつた。しかし、生前の賢治に会うことはなく、花巻の宮沢家を訪れたのは死の知らせを受けてからであつた。弥太の文に「草野心平が代表で見舞に行つた」とあるが、そのような事実は確認されていない。ただ、「小森盛君から書いてきたてがみの表は、あの(春と修羅)における(小岩井農場)の広々とした牧場の群牛の写真であつた。向ふに、サガレンを思はす蕭条とした低い山脈が見へる」とも記されていることから、草野心平以外の誰かが岩手に行つた(賢治を見舞つたかどうかは別として)事実はあつたのかもしれない。

(6)《小森盛》は明治三九年生まれ。長女の瑠香さんによれば、当時千葉の四街道に住んでおり、弥太は小森盛の夫人と親交があつた関係で、連絡を取り合つていたとのこと。小森はアナーキズム系の詩誌「ニヒル」(昭和五年二月〜五月)に関わつていたことが分かつている。当時小森は中堅の詩人としてある程度その名を知られた存在であつたようだ。賢治に関しては、草野心平編『宮沢賢治追悼号』(前出)に「アトラスより」を執筆。また、平沢信一の調査によれば、「詩神」第七巻五号(昭6・7)のアンケート欄(「この人この本」)で、「どんな本を、どんな人に是非出して貰ひたい」の問いに対し、回答の一つとして「宮沢賢治第二詩集」を挙げており、賢治への関心の深さが窺える。

資料（B）「宮沢賢治」へのノート

AntithesisでないSynthesisの時間のことばである。

さういふ円光の座を認めても認めなくとも。

是非の論、観点の私儀皆自由であらう。

この有限の肉と舌とをもつた非情哺乳界の。

たれがしかし宮沢的な無上時圏に寒くはないと言ひきれるのであらうか。

たとひ宮沢賢治に自然科学のマントがあつたにしろそれはOnenessの極への旅の一方便だつた。

ところがわれくのマントは外套を一枚とつてしまつたらそれきりだ。それでゐて平氣に暖かさうなことだけ言ひ争つてゐる。

観念といふことがさげすまれた。哲学が洞穴にかへつた。

たれもが「物」の勲章をつけてあるきまわつた。宮沢の四次元的冬がきて亦すこしの間、宗教時と数理時について誰もが考へるようになるのであらう。

さうして宮沢的な詩について考へなほすであらう。
すこしでもよい。さうした時間もあつてよいときではないか。

さうして静かなところから否定すべきは否定し、とるべきはとるのがいゝのではないか。もう一切の借物一切の根のない流行、そんなものゝ許さないどんづまりになつた。

宮沢の死のある一つの意義をかういふところにも眺めたいと思ふ。
無上道はこゝにもある。雲のなかでない。

何等かの意味で、あの言ひ古された個性といふことがこのたびのことで重視されくるのであらうと思ふ。死者はよろこんでその方便になるのであらう。

そうして偉大な個性といふものが偉大な悟性とどのような関係におれるのか。
すこし中世紀風な失楽園風ながつちりしたあるきかたも一人二人あつてよいときであるのだ。

さうした天地を「春と修羅」の著者の死によつて考へなほしてみるのも遅くはないし、的はづれのことではない。さうしたものゝ建てた雄偉な伽藍はいつの時にも悪いことではない。

「春と修羅」にはわれくの意味する人界のモラルの錯綜がすくないが（むろん春と修羅は一卷の大きなモラルの肉附けだ）それについて、

「人間も自然の一部です」

といふ宮沢さんのことばを先日岩手日報でみてこの味のあるようないようなことばの、よく考へてみると実に深い意味に思ひあたつた。

このようなところの無上光から来た彼の詩の大きさといふものは芒々とした清光のなかに位置してゐるのがあたりまへで、小さいモラルの殻のなかに居る眼にはその灼光だけちらつくのみなのも不思議でない。

つまり肉体などといふものが一枚の葉っぱだけの価値計算に値してゐない凄さにちよつとやられた。

こゝまでくるのはどのような煉獄を得てきたかと思ふのだ。すべては修羅の通^{トウ}過^カだ。

* *

過去・現在・未来・宮沢賢治の芸術はこの一端にも座して悠々とゐた。

永遠時（数理的）のほかの絶体時（宗教的）を自分はわからぬながら考へてみる。

* *

彼の詩はその純粹持続時の律だ。音楽などができたといふのも当然である。

* *

酪塩のにほひが帽子いつぱいで

温くちいさな暗室をつくり

谷のかしらの雪をかぶつた円錐のなごり

水のように枯草をわたる風の流れと

まつしろにゆれる朝の烈しい日光から

薄い睡酸を護つてゐる

……その雪山の裾かけて

撒きちらされた銅粉と

あかるく亘る禁欲の天……

岩^{イハ}手の新聞にあつた春谷暁臥の遺稿序曲である。美しいなと思つた。靈^{レイ}的^{テキ}なものがつんと来るのは否定しなくてよい。三十八歳童^{ドウ}貞^{テイ}の宮沢賢治の莊重な性格悲劇のあとなのだ。

自分はなんとなく彼に大きな希臘悲劇のなかの一人のようなものを感じてゐる。彼は法華經の白道に法悦をたづさへて逝つたであらうけれども。

* *

氣象学とか地質学とかの詩人には珍しい素材があのならは（春と修羅）流れてゐても、もうすでにそれらはあの詩人の絶体時のなかで完全に消化されてゐて、自分たちには、地上とも思へない悠久なものを感じさせられた。

自然科学は所詮、彼の指す極への一つの靈媒にすぎなかつたと思ふ。

科学と信仰との問題など、彼にとつてあまりに物珍らしくない当然の縷^{イト}りのことがらであつたであらうと思はれてゐる。

論理を超へたロゴス それはいつかはまた実証される天地かも知れない そのようなものを自分には感じさせられる。

宮沢には余りに当然すぎる第四次元の天地であり、それがすべて何の破綻のない彼の肉体の部分であることは、「春と修羅」をみてよくうなづかされた。

* *

宮沢の死は不思議に自分を暗くさすものをもたない。それがどこから来るか言はないでもないゝことであらふ。大きな悲劇のあとのような潔白で神秘的感動……

自分は地上で彼の詩集一巻の外何のつながりももつてゐないものだが、有縁以上のこゝ

るの縷りをかなりながらく信賴してきたものである。

彼のいふ時空的無限のそこにある宗教時があるとしたら

われときみの座はこゝに相隣つてゐる。さうした親しみのなかに自分は亦きみの詩集をこの僻遠に愛してきたものである。――^{〔注4〕}・六夜。 於土佐。

注

(1) 《岩手日報》上に賢治関連の記事が掲載されたのは、没後間もなくの時期に限れば、九月二十九日と一〇月六日の二度で、「宮沢賢治氏追悼号」として「学芸 第三十七輯」、「学芸 第三十八輯」の欄に掲載されている。弥太が賢治の言葉として引いた「人間も自然の一部です」は、九月二十九日付の追悼号に載った、森莊巳池の「追憶記」に見える、「人も自然の一部でせう……」宮沢さんが云つた「こと。おそらくこの「宮沢賢治氏追悼号」(「岩手日報」)は、母木光が弥太に郵送したもの。

(2) 《岩手の新聞》とは「岩手日報」のこと。詩「春谷暁臥」は、一〇月六日付の「宮沢賢治氏追悼号」で、「春谷暁臥ノ……(心象スケッチ)……」宮沢賢治遺稿」として、全五行が掲載された。弥太が引用したのはその冒頭九行。

(3) 《彼の詩集一巻》とは大正一三年四月に刊行された『春と修羅』のこと。弥太がどのような経緯から『春と修羅』を入手したのか、「弥太年譜」ではその点が不明のままだが、資料(C)「春と修羅の我が思い出」により、その疑問は解決する。

(4) 《一一・六夜》は執筆の日付であるが、十字屋書店版『宮沢賢治研究』(前出)での再録には、この日付が記されていない。弥太は賢治没後約一ヶ月半の段階でこの一文を執筆したことが分かる。

資料(C) 春と修羅の我が思い出

私が故人の名を知つたのは例の詩話会から出てゐた詩^{〔註〕}日本詩人誌上、多分大正十三年ではなかつたかと思ひます。春と修羅のあの薊の押絵のある麻表紙の詩集の奥付が大正十三年四月二十日発行となつてゐますから。あの時の詩集の紹介者は佐藤惣之助氏でなかつたかと記憶してゐるが、或は川路柳虹氏だつたかも知れない。豊富絢爛な未来派的官覚異装を讃えた詩評で、この東北の天才を評するに決して不当でなかつたやうに思ひますが、今のやうな広汎深刻な人性的意味の探求では決してなく、自分にはハルトシユラといふおどろくべき野生のちからを持つた Dawn man 的意味の現出に官覚的驚異を感じるの外はなかつたやうに印象されてゐます。といふのがそのころの詩壇では、佐藤惣之助の現出にしろ、誰にしろそのやうな未来派的印象意味の異装といふのが、詩におけるひとつのキイノートでしたから。その意味で批評も所謂印象批評の埒を出でなかつたのは当りまへでせう。

僕には何となくこのハルトシユラといふ名からそれらの批評から恐ろしく大きな黄金のかぶと虫や彗星を想像したものだつた。あたらずとも遠からずといふ言葉がありますが、作品をみないでもその頃宮沢賢治といふ人は今のやうな宗教的人性意味としての半面を窺ふの余裕もなく、あの(原体剣舞連)と云つた一寸薄気味の悪い印象でした。

それ以来この始原人は名だけをその誌上の片隅に留めたまゝ一向何時まで立つても姿を現はさず仕舞でした。思ふに民衆詩派なんどの勃興期にあたつてゐた日本の詩壇にはこの地殻的内部時限の存在を遇するには、余りにもすべてが地表的でした。かへつて今のやうな激

動期に宮沢賢治が現はれるといふのは一見不思議なことでもあります。これは土地にもサイクルが、あるやうに人の頭脳にも、その帰縁を呼ぶ幾サイクル目がかへつてきたといふので、たやすく理解したいと思ひます。何もかもがあてにもならないとすると、この詩人の哲學的時限が人をひきつけるのは前から既に予定されてゐたことなのです。

私たちはこの驚くべく不幸で驚くべく光りを懷抱する時間の幸福を身にまといて今生きております。

私はこの人の詩集を出版後三四年たつてから私の辺鄙な土地の町の古本屋の埃のなかから偶然拾ひ出しました。貳円四拾銭の定価のものを符牒どほりの六拾五銭で、奪ひとるやうに買ひ（多分僕が買はなかつたらこの詩集は何年も宮沢さんの死ぬ前まで、その通りだつたかも知れません。この辺鄙でその真価を知る人は寡いのですから。）その晩徹宵でこの詩集のあの好もしい重い手ざはり活字に吸ひとられて仕舞ひました。松の針と無声慟哭のころへ来てとうとう涙を滾して仕舞ひました。その夜の印象だけはいくら全集版をみても泛びません。自分は心の疲れたときにはこの綴系の外れた関根書店発行、花巻川口町吉田忠太郎さんの印刷した古い原本をみかへすことにしてゐます。手沢とはこの本の頁につけるべき名であらうと思ふのです。

それ以来、詩壇街道で宮沢賢治さんと出会したことは後にも先にも日本詩壇創刊号に出た、（移化する雲）だけでした。

・はつれて軋る手袋と

凍つて旨ひた月の鉛・

母木光さんだつたか誰だか、愈々宮沢さんがいけなくなつてゐるといふ何辺かの涙のにじむ便り、僕の手蹟が、そつくりその人に似通つてゐるといふのでぎつくりせられたくすくすたい然し薄暗いがらん洞の記憶、いちどお便り差上げたいといった風な衝動もあるに

はあつて、その俚故人の死を迎へて仕舞ひました。その一人が別の意味の暗い彗星石川善助さんでした。

兎角、どういふわけか、この原本が巡り廻つて土佐の田舎の僕の手許に一部を留め、

遺。贈法華経などと共に身を暖めてくれてゐることに応法的なものを感ぜずにはゐられません。

菊池さんなどのやつてゐるお仕事の歴史的なるものを感じながら恐らく生涯、その賢治の会をこの地上の眼でみることの出来ない今の自分であるなら、せめて身近で賢治的なるちらを開拓することが一つの責のやうな感じもしてこの間も教育者の集会で賢治について話させて貰つたことでした。

注

（１）《詩誌日本詩人誌上》とあるのは、大正一三年一月一日発行の「日本詩人」第四巻第一二号に発表された、佐藤惣之助の「十三年度の詩集」の一文である。佐藤は大正一三年の収穫として渡辺渡の『天上の砂』と賢治の『春と修羅』を取り上げ、「それに『春と修羅』。この詩集はいちばん僕を驚かした。何故なら彼は詩壇に流布されてゐる一個の語彙も所有し

てゐない。否、かつて文学書に現はれた一聯の語藻をも持つてはゐない。彼は氣象学、鉱物学、植物学、地質学で詩を書いた。奇犀、冷徹、その類を見ない。以上の二詩集をもつて、僕は十三年の最大收穫とする」と絶賛した。弥太と詩誌「日本詩人」との繋がりに関して、堀内豊の「弥太私抄」(前出)によれば、弥太は当時新潮社から発刊されていた「日本詩人」を定期購読していたとのことで、大正一三年六月一日発行の「日本詩人」第四巻第六号、第一回新詩人号(萩原朔太郎選)には、弥太の詩「最後の蒼穹」の掲載されていたことが分かってゐる。

(2)《六拾五銭》で、弥太は『春と修羅』を高知の古本屋から入手したとあるが、長女・瑠香さんが保管なさる『春と修羅』を確認したところ、古本屋店主が書き込んだと推定される「六十五銭」の文字が残されていた。弥太自身の詩集への書き込みはなく、本の傷みもほとんどない。

定価が二円四〇銭の『春と修羅』が六五銭で売られていたということは、『春と修羅』の辿った運命を考えると興味深い。『春と修羅』の古本屋価格が当時どれくらいであったかは、回想者によって異説がある。草野心平は大正一四年頃のこととして、「その頃神田の露店の古本屋では『春と修羅』は五銭で叩き売り同然の待遇をうけていた」(日本詩人全集20『宮沢賢治』解説、新潮社、昭42)と記し、賢治の若き詩友森莊巳池は、大正一四年上京した折り夜店の古本屋で、「一冊二十銭也でゾッキ本にまじつて売られていた」(『宮沢賢治の肖像』津軽書房、昭49)ことを記している。また、堀尾青史の『年譜宮沢賢治伝』(中央公論社、平3)には、「関根というのはケチネとよばれたほど、評判の芳しくない男で、このとき五〇〇部委託されたが実際に取次店へ流したかどうかわからない。どうやらゾッキ本に出したらしく、古本屋で五十銭でならんでいた」と記されている。

弥太は高知の古本屋で『春と修羅』を入手したのであるが、高知にはもう一冊『春と修羅』の流れて来ていたことが知られている。森莊巳池の回想(前出)によれば、昭和二九年頃、「神田の一番大きな古本屋(一誠堂)のケースの上に、たった一冊」、「×千円」もする『春と修羅』が「ほこらしげに」飾られていたが、店員の言うことによれば、それは高知で見つけられたものだった。高知に流れて来た『春と修羅』は少なくとも二冊は存在したのである。

(3)《日本詩壇創刊号》は、昭和八年四月一日、吉川則比古の編集で日本書房より発行された。弥太が「日本詩壇」創刊号に載った賢治の「移化する雲」を知り得たのは、弥太自身「日本詩壇」の同人であり、同号に作品(「ある男」)を発表していたからである。また、「日本詩壇」の第一巻七号(昭8)には、賢治の遺稿として「山火」が掲載され、草野心平の「宮沢賢治追悼に関して編集氏へ送る弁解」と、母木光の「宮沢賢治氏の死貌(デスマスク)」が寄せられた。

詩誌上での賢治作品に関して、弥太は「それ以来、詩壇街道で宮沢賢治さんと出会したことは後にも先にも日本詩壇創刊号に出た、(移化する雲)だけでした」と、「日本詩壇」以外で目にした経験のないことを記しているが、生前賢治の作品がまったく世に出なかったわけではない。岩手関連の詩誌は除くとしても、草野心平の編集する「銅鑼」にはほぼ毎号のように載っていたし、「詩人時代」(編集・吉野信夫)や「新詩論」(編集・吉田一穂)などにも掲載されていた。しかし、発行部数の少ない同人誌のような場合、弥太の目にとまらなかったのも当然である。

一方、「詩神」（編集・田中清一、途中宮崎孝政らも編集に加わる）に載った賢治関連記事に関しては、弥太がそれを読んでいた可能性が高い。弥太は昭和六年頃「詩神」誌上に詩を発表しており、草野心平の「宮沢賢治論」（第7巻第5号、昭6）など当然目にしていたと思われる。

（4）『母木光』に関しては資料（A）「随想 宮沢賢治」の注を参照。

（5）『石川善助』に関して、弥太は自伝「楚歌春秋」（高知新聞連載、昭10・10）で、「自分の詩の知己になつて呉れた石川善助」と記している。

（6）『遺贈法華経』に関しては（A）「随想 宮沢賢治」の注を参照。

（7）『菊池さん』は、雑誌「イーハトーヴォ」の編集・発行者である菊池暁輝のこと。菊池は盛岡で「宮沢賢治の会」を主催し、昭和一四年一月から「イーハトーヴォ」を創刊。ほぼ月刊を続け、昭和一六年一月第一三号で休刊した。戦後、復刊して昭和二九年二月から昭和三〇年八月まで六号（通巻一九号）を刊行した。

三 弥太の賢治理解

（一）弥太が賢治を知った経緯とその後

資料（A）（B）（C）から推定できる範囲で、弥太が賢治を知った経緯についてまとめておくと、次のようになる。

弥太が賢治の名を知ったのは、詩誌「日本詩人」の第四卷第二二号（大13・12）に掲載された、佐藤惣之助の「十三年度の詩集」においてであった。それから「三四年」たって、弥太は「私の辺鄙な土地の町の古本屋」で偶然に『春と修羅』を見つけた。売値は「六拾五銭」であった。その場で『春と修羅』を買い求めた弥太は「徹宵」で詩集を読み、「松の針と無声慟哭のところへ来てとうとう涙を滾して仕舞」う体験をした。そしてその後も、「心の疲れたときには」この原本を読み返していた。それから後、詩誌等で賢治の詩に接する機会はなく、唯一読んだのが「日本詩壇」創刊号（昭8・4）に掲載された「移化する雲」であった。その他、間接的な情報として、岩手の母木光から賢治の病状や、仙台の詩人（不詳）から白鳥省吾らの賢治訪問に関する逸話、千葉の小森盛から小岩井農場の絵葉書（内容不詳）といったものが、弥太のもとにもたらされていた。

それにしても、賢治の死去の知らせや遺言が時を経ずして弥太にもたらされ、「岩手日報」紙の「宮沢賢治氏追悼号」までもが届けられていたという状況は、注目に値するだろう。このことは、弥太が一地方的存在を超えた詩人として認識されていた事実を示すとともに、当時の詩人間におけるネットワークの一端を窺い知るうえでの資料となる。弥太が母木光と連絡を取り合うようになった契機はどのようなものだったのか。残された弥太資料の側からはこれ以上の追究は困難だが、もし母木側に弥太書簡が保管されているならば、今後何らかの進展も期待できるかもしれない。

また、弥太と草野心平との繋がりはどのようなものであったのか。草野心平編『宮沢賢治追悼』（前出、次郎社刊）への執筆は、基本的には草野からの直接の依頼と考えるべきだろうが、草野の「宮沢賢治追悼に関して編輯氏へ送る弁解」（「日本詩壇」第1巻7号、昭8・12）によれば、『宮沢賢治追悼』への執筆依頼者として名を挙げた二六名に弥太の名は含まれていない。この点に関し、「弥太私抄」（前出）の著者堀内豊氏のご教示によれば、草

野は弥太と面識がなく、吉川則比古（「日本詩壇」編集者）を介した依頼であった可能性が高いとのことであった。草野は弥太に関し「彼は女性的な詩人だね」と評していたとのことである。吉川則比古の外、母木光を介した依頼であった可能性も残されているだろう。

次に、資料（A）（B）（C）以外で調べ得た、弥太の賢治関連資料を挙げておく。一つ目は、弥太が残した自伝的文章「楚歌春秋 我が詩生活の譜」（高知新聞連載、昭10・10）の中の一節で、「今から思ふと宮沢賢治の影響が多分にあつたと思ふ。宮沢といふ人の春と修羅は当時日本の詩人に推賞されてゐたが、この人は作品は出さなかつたやうだ。春と修羅の原本を手に入れて無声慟哭になかされた記憶も生々しい」というもの。二つ目は、昭和一年三月、高知新聞社主催で行われた「詩の講演と朗読の会」で、弥太が朗読した二編の詩のうちの一つとして、賢治の「永訣の朝」を選んでしたこと。この会には、吉川則比古や間野捷魯ら、阪神在住の詩人たちが招かれ講演している。三つ目が、「イーハトーヴォ」第一二号（昭15・11）に掲載された、特集「イーハトーヴォ刊行一周年に際して」に応じた弥太の一文である。「広イ野ノ草ヤ林ノ樹タガ風ニユラレテ声ヲ立テルトキ、私ハソノヤウニ光リキラメイテ清イ賢治ノ精神ヲ常ニ念フ。コレハ野ヤ山ニ住ム者ノ普賢ノ声デアリ巷ニ住ムモノニ憩ノ翼トナル示願デアル。言ヒ尽サレ汲ミツクサレルトイフコトハナイ。コレハ野ヤ草ヤ石ヤ空ノ精神デアルカラ。ソノ人々ガ成長スレバスルホド賢治ノ精神ハ高イ所デ理解ヲ深メルト思フ」。これは現在『宮沢賢治初期研究資料集成』（前出）で確認することができる。

（二）弥太研究における賢治関連記事の問題点

生前『瀧』一巻だけを世に問い、四三歳の人生を閉じた岡本弥太であったが、戦後郷土では弥太再評価の機運が高まり、これまでに幾度か岡本弥太詩集の刊行が企画、実現されてきた。私が確認したものとしては、昭和十三年一月刊行の『岡本弥太選集』（編集・島崎曙、発行・岡本弥太選集刊行会）、昭和三十八年五月刊行の『岡本弥太詩集』（編者・岡本弥太詩集編纂委員会、発行・高知県文教協会）、昭和六〇年二月刊行の『岡本弥太詩集 瀧篇』（監修・山川久三、発行・泰樹社）の三種である。戦前のものとして、弥太が琴歌と名づけた小品を編集した『岡本弥太 琴歌抄』（編集・住江明、昭18・4。橋詰延寿により再刊、昭25・5）がある。

右のうちの、『岡本弥太詩集』と『岡本弥太詩集 瀧篇』に付された「年譜」には、その「大正十三年」の項に、賢治関連記事を見出すことができる。

大正十三年（一九二四）二十六歳

十月二十日、高岡郡能津村柱谷（現在高岡郡日高村能津）畠山寅太郎三女由（明治三十八年二月五日生、当時十九才）と結婚。郷土歌人有光滋樹、清岡菅根らと「海底森林」の合同誌「あをすげ」を発行。短歌、俳句も作る。この頃、宮沢賢治の「春と修羅」を読む。（『岡本弥太詩集』）

大正十三年（一九二四）二十六歳

郷土歌人・有光滋樹、清岡菅根らと「海底森林」の合同誌「あをすげ」を発行。短歌、俳句も作る。この年、宮沢賢治の「春と修羅」を読む。「日本詩人」（新潮社刊）に、

二つの年譜を比較してまず気付くのは、昭和三八年版に記されていた弥太の《結婚》の事項が昭和六〇年版には見られないことで、実はこの事項は前年の「大正十二年」(二十五歳)に移されている。このような改変にわれわれは弥太研究の進展の跡を確認できるのだが、賢治関連記事に関していえば、両年譜とも大正一三年の項で扱われており違いがない。このことは、逆にいえば、その間賢治関連事項に関しては研究が進展していなかったことを物語っている。周知のように大正一三年とは『春と修羅』の刊行年であり、おそらくその知識に基づき、年譜作成者は大正一三年の項に「この頃、宮沢賢治の『春と修羅』を読む」と書き記したのだろう。しかし、この記事が、弥太自身の「出版後三四年たつてから」の回想に矛盾することはいうまでもない。しかも、昭和三八年版で「この頃」と記されていたものが、昭和六〇年版では「この年」と、さらに限定的な表現に改められており、年譜の精度として後退したものとなっている。

また、堀内豊氏の労作「弥太私抄」(高知新聞連載、昭51・4、5)にも、『春と修羅』の入手時期にふれた箇所がある。「『春と修羅』との出会い」(昭和五十一年五月七日付掲載)によると、宮沢賢治が『春と修羅』を関根書店から自費出版したのは一九一三年(大正一二)四月であるが、弥太はこの年「『春と修羅』を入手している」と記されており、年譜記事と同様の判断が見て取れる。

さて、もう一点検証しておかなければならないことがある。それは弥太と賢治との親交の有無の問題である。これまでの弥太研究では、賢治と弥太との間に何らか書簡の往復があったとの見解が有力であった。しかし、資料(B)に「自分は地上で彼の詩集一巻の外何のつながりももつてゐない」と、また資料(C)に「いちどお便り差上げたいといった風な衝動もあるにはあつて、その俚故人の死を迎へて仕舞ひました」と記されていることから明らかに、二人の間に書簡の往復はなかったと判断すべきである。また、弥太研究者が必ず目を通してゐるはずの資料「楚歌春秋 我が詩生活の譜」(前出)を確認するかぎり、弥太は、「春と修羅の原本を手に入れ」た、「宮沢賢治の影響が多分にあつた」とは記していても、決して賢治と《親交》があつたとは記していないのである。

しかるにいつしか、弥太と賢治との間には、書簡の往復を含む《親交》の存在していたことになってゐた。今回調査した範囲でいうならば、その最も早い例は、『土佐近代文学者列伝』(高知新聞社刊、昭37・8)所収の「岡本弥太」(執筆・竹村儀一)である。そこには、「この点生前親交があり、お互いに影響しあつた宮沢賢治と相通ずるものがある」と記されている。竹村氏が、どのような根拠に基づき弥太と賢治との《親交》を記述したのか不明であるが、その後の弥太研究においても、竹村氏の見解は訂正されることなく、弥太と賢治との《親交》は動かぬ事実であるかのように記されてきた。

前出の堀内氏の「『春と修羅』との出会い」にも、次のように記されている。

のちに弥太と賢治は、折にふれて東北と四国の極地間で互いに文通をかわしていた形跡がある。そのことを、弥太と親しかつた、さる先輩から戦中時代、聞かされたが、こゝにち弥太宛の賢治断書を見ることが出来ないのはまことに惜しい。

堀内氏の場合は竹村氏と異なり、「文通をかわしていた形跡がある」と断定を避けた書き方であり、しかも、「弥太と親しかった、さる先輩から戦中時代、聞かされた」とその情報源を明示している点、学問的に問題はない。だが、そこから受ける印象は、根拠を明らかにしている分強烈で、確かに弥太と賢治との間には《親交》が存在していたと読者に感じさせるものである。「さる先輩」の見たものが何であったか、一概に賢治書簡でなかったと決めつけるわけにはいかないだろうが、弥太自身「いちどお便り差上げたいといった風な衝動もあるにはあつて、その俚故人の死を迎へて仕舞ひました」と書き残している以上、「さる先輩」の記憶違いと判断せざるを得ないだろう。

ちなみに、現在弥太宛の書簡はごく少数しか保管されておらず、賢治書簡はむろん、確かに存在したはずの岩手の詩友からの書簡も確認することができない。長女瑠香さんの記憶では、賢治書簡の存在は記憶にないとのことである。

次に引用する嶋岡晨氏の「岡本弥太」（『土佐の近代文学者たち』土佐出版、昭62・4）は、弥太に関する比較的新しい研究（紹介文）であるが、弥太と賢治との《親交》は、さらに強固な事実として認識されているさまが見て取れる。

もう一人の恩人 それは、手紙をやりとりするだけで、ついに一度も会うことがなかった宮沢賢治である。なぜなら、大正十三年刊行の賢治詩集『春と修羅』こそ、弥太の詩精神の方向を決めるほど重要な影響力をもち、この詩集との出会いが、弥太のかくれた特質を充分に照らし出す動機となったのだから。のちに《南方の賢治》との呼称が弥太にもたらされるのは、少しも不自然ではない。おそらく、大正十四年、急性肺炎と咯血のため入院したおりも（一月）、父福太郎（七十三歳）の病死の前後も（同一月）、長女が生まれたときも（大正十四年五月二十三日）、弥太はさまざまの思いをこめて、『春と修羅』を読みかえしていただろう。

右の引用文には、私が指摘した二つの問題点が共に含まれている。その一つは「手紙をやりとりするだけで」の箇所、いかにも二人の間に書簡の往復があったかのような書き方は、訂正されねばならない。二つ目は、「大正十四年、急性肺炎と咯血のため入院したおりも（一月）、父福太郎（七十三歳）の病死の前後も（同一月）、長女が生まれたときも（大正十四年五月二十三日）、弥太はさまざまの思いをこめて、『春と修羅』を読みかえしていただろう」の箇所である。この箇所は嶋岡氏が想像力を駆使して創作したものと考えられるが、それは、弥太が大正一三年に『春と修羅』を読んだという前提なくしては成立し得ないもので、やはり訂正が必要である。

このように、弥太研究における賢治関連事項は、幾つかの検証、訂正されねばならない問題を含みながら現在に至っているのである。

（三） 弥太の賢治理解の独自性

弥太の賢治理解は、賢治との親交の有無にかかわらず、その独自性において高く評価されてよいと私は考えている。弥太は賢治の宗教詩人としての本質を見抜いていた。これが私の指摘したい弥太の賢治理解の特質であり、同時代ならびに現在の賢治研究においても有効性を失うことのない独自性と思われる。

賢治と宗教、なかならず仏教との関わりが賢治研究上欠かすことのできない視点であることは、いまさら多言を要しないと思う。しかし、賢治における文学と宗教とのあの濃密な緊張関係に焦点をあてた研究が、これまでどれほど試みられてきたかと振り返れば、さしたる進展もなかったといわざるを得ないであろう。例えば、近年『宗教詩人 宮沢賢治』（中央公論社、平8）と題された丹治昭義の賢治論が出され、そこにわれわれは、仏教学者ならではの傾聴に値する見解をさまざま見出すことができるのだが、それはあくまで賢治詩に関する仏教学的解説というものに止まるもので、弥太が鋭く直感した宗教詩人としての賢治理解には及ばないのである。

さらに、もともと賢治の詩を宗教との関わりから捉える視点は、賢治全集や伝記研究などの資料が整った後はじめて可能になったものである。生前批評や追悼文などの同時代評においては、基本的に、詩人賢治の用いる語彙やイマジネーションの豊饒さへの驚嘆がその中心をなしていた。同時代評に関して、平沢信一がすでに「賢治の語彙に対する関心の深さ」（前出、大正ノ昭和初年の宮沢賢治評価 「詩神」を軸として 「」を指摘しているように、賢治は、その語彙やイマジネーションの豊饒さによって同時代の詩人たちを魅了していたのである。ここでは平沢の指摘との重複を避け、賢治のイマジネーションに関する言及に限って引用してみると、高橋成直（元吉）は、『春と修羅』を読んでゆくと、あとからあとから、待ちきれないやうに湧き出してくる湧水を感じます」（『哀惜』、『宮沢賢治追悼』所収、昭9・1）と述べ、菱山修三は「まことに放恣といふに近い感性の豊饒は、眩いばかりである」（「故人の業」同）と述べている。また、逸見猶吉は「溢れてはとめどなく流れる豊饒なイマジナツシヨンの煥発と、疲れを知らぬ強大な滲透力とはなんと私を撃つてきたことだらうか」（「小稿」同）と述べている。

このような賢治の語彙やイマジネーションへの関心の深さは、当然弥太の場合にも指摘できる要素である。しかし繰り返し返すが、弥太の場合賢治への関心が賢治の語彙やイマジネーションに止まらず、その奥に垣間見られる宗教の問題にまで及んでいる点、特質がある。「気象学とか地質学とかの詩人には珍しい素材があんなには（春と修羅）流れてゐても、もうすでにそれらはあの詩人の絶体時のなかで完全に消化されてゐて、自分たちには、地上とも思へない悠久なものを感じさせられた。／自然科学は所詮、彼の指す極への一つの霊媒にすぎなかつたと思うふ。／信仰と科学との問題など、彼にとつてはあまりに物珍らしくない当然の縷りのことであつたであらうと思はれてゐる」（資料B）。また、「自然科学をして力学をして光学をして最も高度に芸術生命流動の霊媒として役立てた（屈折率）以下の摩訶不思議の芸術に（或は複眼的宗教）」（資料A）とも記している。

当時、弥太以外にも、賢治の言語表現の奥に潜むものに形を与えようとした試みがなかつたわけではない。例えば、永瀬清子がそうである。永瀬は「ノート」と題する一文（『麵麴』第2巻第7号、昭8・8）で、「人は彼に修辭の華麗をのみ見がちであるが」と、賢治の言語表現の非凡さを認めた上、「彼はむしろ自然とけじめもつかぬまでにとけ合ひ、客観した自然をつたふと云ふよりは、彼の内部の自然をあとからあととさらけ出したのだ」と賢治の言語表現の依つて来る源への解釈を試み、それは賢治の精神が「古代人的」であり「神話作者的」であるからだとして規定した。このような賢治像の追究の方法は、現在の研究においては賢治を『縄文的』と規定することなどに受け継がれており、一つの賢治理解の有りように貢献しているといえるだろう。

しかし、私が弥太の賢治理解を、永瀬以上に、またこれまでの賢治研究（宗教面からのアプローチ）以上に優れると考えるのは、弥太には複眼的ともいうべき視点があり、賢治を決して単純化することなく、その総体において理解しようとする強い意志のようなものが感じ取れるからである。「複眼的」とは弥太が賢治に与えた「（或は複眼的宗教）」（資料A）からの借用だが、弥太が賢治に複眼的宗教を見ていたように、私は弥太の賢治理解にその複眼性を見るのである。

「春と修羅は形而上下をつらぬく環状的因果律の連続模様だ。ある人には奇異にみへある人には二つとない經典とならぶ。自分には書かれたといふ感情的なもののより、測定された一つの宇宙といふ感じが深い」（資料A）。「自分はなんとなく彼に大きな希臘悲劇のなかの一人のようなものを感じてゐる。かれは法華経の白道に法悦をたづさへて逝つたであろうけれども」（資料B）。「そうして偉大な個性といふものが偉大な悟性とどのような関係におれるのか」（資料B）。「何もかもがあてにもならないとすると、この詩人の哲学的時限が人をひきつけるのは前から既に予定されてゐたことなのです。／私たちはこの驚くべく不幸で驚くべく光りを懷抱する時間の幸福を身にまといて今生きております」（資料C）。

弥太の書き残したものは、むしろ本格的な評論、研究を意図したものではない。したがって、単純に弥太の仕事を他の人のそれと比較云々することは、軽率の謗りを免れないことかもしれない。しかし、弥太の書き残したわずかな量の随想的な仕事からでも、われわれは、弥太の独自の深い賢治理解を窺い知ることができるように思う。

*

本来ならば、詩人弥太の全体像を追究し、しかる後、弥太の賢治理解を展開すべきかとも考えるが、それは今の私には任が重く、この場合は弥太という優れた賢治理解者の紹介に止めおくことにした。今後さらに本格的に追究する研究者の出現することを期待する。

今、私が確かにいえることは、弥太は本当の意味での『春と修羅』の読者であったということである。そして、弥太に出会えた自分の幸せを自覚しつつも、弥太のごとく『春と修羅』を読むことのできぬ自分を切に憐れむのみである。

付記 本稿発表後、『岡本弥太詩集 山河篇』（泰樹社、平10・1）が刊行された。監修は山川久三。「年譜」の「大正十三年」の項を確認すると、「この年、宮沢賢治の『春と修羅』を読む。」とあり、年譜としての進展は見られない。

第三章

《宗教的欲求の時代》と賢治受容

宮沢賢治生誕百年の喧騒

宮沢賢治研究に限っていえば、一九九六年は賢治生誕百年ということで、疾風怒涛のごとき一年であった。宮沢賢治学会イーハトーブセンターでは、六年前よりビブリオグラフィーを作成し、私もまた作成委員の一人として、関連資料の収集・記録化に努めてきたが、九六年における賢治研究の総数は、エッセイの類いを除いても約六〇〇、前年の二倍にあたるす

さまざまであった。雑誌の特集も目白押しで、「文学」(第7巻1号、96・1)、「科学朝日」(第56巻2号、96・2)、「児童文芸」(第42巻4号、96・4)、「文芸」(第35巻2号、96・5)、「国文学」(第41巻7号、96・6)、「文学界」(第50巻9号、96・9)、「へるめす」(第61号、96・7)、「短歌研究」(第53巻8号、96・8)、「すばる」(第18巻9号、96・9)、「短歌」(第43巻10号、99・10)、「現代詩手帖」(第39巻10、11号、96・10、11)、「解釈と鑑賞」(第61巻11号、96・11)、「日本児童文学」(第42巻11号、96・11)等々、挙げればまだ四〇はある。

このような状況を、限られた紙幅で展望することは、私のよく成し得ることではない。したがって、ここでは個人的な問題意識に引き付けたかたちで、九六年を振り返ってみることにする。

八月末、花巻市において宮沢賢治国際研究大会が開かれた。国外からの参加は一ヶ国であった。あまた繰り上げられた生誕百年の企画としては、最も意義深いものであったかと思う。現在までに賢治作品の翻訳は一五言語に広がっている。また、賢治の国際化に呼応するかたちで、ジョン・ベスター訳の『ベスト・オブ宮沢賢治短編集』(講談社、96・4)、『銀河鉄道の夜』(同、96・8)、ロジャー・パルバース訳の『英語で読む銀河鉄道の夜』(筑摩書房、96・3)が出版された。ジョン・ベスター訳は八五〇九二年(講談社英語文庫)段階ですでに入手可能だったが、今回の本にはベスター自身の作品評が付されており、賢治論として見逃せない。ベスターは、「銀河鉄道の夜」や「風の又三郎」といった代表作と目される作品よりも、短編集の方を高く評価する。その根拠についてはこの場では省略するほかないが、国内の研究者が二の足を踏むところをズバリと言いのけている。さらに、アメリカにおいてだが、Joseph Sigris and D.M. Stroud『MilkyWay Railroad』(Stone Bridge Press)が出版された。91年にはSarah M.Strong 訳『Night of The Milky Way Railroad』も出版されており、「銀河鉄道の夜」に関し現在四種の英訳をもつことになる。底本としての全集を用いているかという問題も含め、今後、賢治研究の一分野として比較翻訳論が求められることになるだろう。

「銅鑼」の同人で、昭和四年花巻に病床の賢治をたずねた詩人として知られる黄瀛が、国際研究大会の記念講演者として中国から招かれた。九〇歳という高齢を感じさせない張りのある声で語った回想には、賢治研究にとって衝撃的な或ることが含まれていた。もっとも、そのことを他の研究者がどれほどの重さで受け取ったか定かではない。問題は、黄瀛が賢治から聞いたとされる「大宗教の話」(「南京より」、34・1)のことである。この「大宗教の話」は、晩年における賢治の信仰のありようを探る資料として、従来多くの研究者によって注目されてきたが、それが田中智学(国柱会創設者)に関わる内容であったことが明らかにされた(「岩手日日」96・8・29付)。

これにより、賢治の信仰が、大正三年の『漢和対照妙法蓮華經』との出会いから、終生変わることなく、しかも田中智学を通じて法華経信仰によって貫かれていたことが実証的に確かなこととなった。このことは賢治文学＝法華文学の図式の成立を意味し、二〇年来の賢治研究の発展が、法華経以外の要素をいかに賢治作品に見出すかによって支えられてきたことを思えば、賢治研究者に再考をうながす内容といえる。これまで、キリスト教、浄土教、真言密教、ヴェーダ哲学、チベット密教、アニミズム、シャーマニズム、スピリチュアリズムなど、さまざまな要素が賢治文学を解き明かす鍵として指摘されてきた。しかし、多く

の場合、それらの要素と法華経信仰との関わりについては、意識的に無視するか、それとも手前勝手な都合のよい論理でお茶を濁してきた経緯がある。それらの論が賢治文学の真の意味での解明に役立ち得ないことは、ある程度、工藤哲夫の精緻な日蓮遺文の考察などにより、予告されていたはずなのである。

とはいっても、賢治文学＝法華文学の図式から一步も踏み出そうとしない、いわば二〇年以上も前の研究レヴェルで書かれた論文が後を絶たない状況もいまだ確かに存在しており、黄瀛の証言を、我が意を得たりと利用する研究者の出現する危険性も大で、むしろそのことの方をこそ懸念すべきかもしれない。丹治昭義の『宗教詩人宮沢賢治』（中央公論社、96・10）は、仏教に関する深い知識に裏付けられた労作ではあったが、丹治の場合も従来の仏教学者と同じく、基本的に宗教を文学の問題として捉える問題意識が抜け落ちており、仏教学者の描く賢治像の物足りなさがあらわである。

九六年の賢治研究の物言いは、総じて穩健（追従的？）であつたようだ。その中で、吉田司の「遊民のバーチャルランド」（『文学界』、前出）は、管見の範囲で最も辛口の賢治批判であつた。このような言説に対し、賢治研究者はどのような反論が可能なのであろうか。吉田は、啄木の評論「時代閉塞の現状」を援用し、賢治の宗教的情熱は、啄木が警告を發した宗教的欲求の時代 にすっぽり当てはまるもので、賢治がもし肺病でなかったなら天皇翼賛に合流する性質のものであつた、と主張した。私がこの論に注目したのは、おそらく吉田の主旨と少し異つた地点にある。われわれもまた現在、宗教的欲求の時代に生きているのではないか、と考えるからである。というのも、われわれの多くは、もはや、科学・合理主義・イデオロギーといった戦後民主主義を支えたコンセプトを信じることができず、昨今の賢治受容の隆盛という現象も、少なからず宗教的欲求の時代と重なっているに相違ないからである。

梅原猛、鎌田東二、中沢新一、見田宗介、河合隼雄、山折哲雄らは、賢治研究上多くの影響力を發揮してきた人たちが、彼らは、島園進（『精神世界のゆくえ』東京堂出版、96・9）が「靈性的知識人」と名付ける人たちと偶然にも一致するのである。島園によれば、靈性的知識人とは「キリスト教知識人のような宗教的知識人と異なり、日本宗教のさまざまな流れや世界の諸宗教（とりわけ東洋宗教）に素材を求めて自分の思想・言説を組み立てる」人のことで、啄木の「時代閉塞の現状」にもその名を引かれる綱島梁川（「予が見神の実験」一九〇五年五月）を「近代の靈性的知識人の伝統を基礎づけた人々」の一人として挙げている。さらに、島園によれば、現代、とくに一九八〇年代以降、仏教・キリスト教・イスラム教といった歴史宗教にかわつて、新靈性運動（ニューエイジ運動等）がアメリカや日本において急速に發展してきており、その信念や觀念の特徴は、「自己変容あるいは靈性的覺醒の体験による自己実現」「宇宙や自然の聖性、またそれと本来的自己の一体性の認識」「死後の生への関心」「旧来の宗教や近代合理主義から靈性／科学への統合」「エコロジや女性原理の尊重」などにあるとされる。まさに、賢治作品および賢治その人に見出される特質と重なることに気づくだろう。そして皮肉なことに、そこに指摘される精神類型は、「オウム真理教や統一協会、幸福の科学、ワールド・メイトのような新新宗教の教団に出入りしている若者」「書店の『精神世界』のコーナーにたたずむ若者」（同書）として、社会現象化しているのであり、賢治研究のある側面にもそれは確かに当てはまるのである。

となれば、吉田が賢治に向けた批判は、実は賢治研究者に向けられた批判と変わらないわ

けで、その陥りやすい精神類型からわれわれがどのように自由であり得るか、熟慮されねばならない課題にほかならない。吉田の賢治批判そのものに対しては、「文学」（前出）における座談会の栗原敦の発言のなかに、見田宗介の質問に答えるかたちで一つの答えが見いだせるので、一読を請うところである。誤解を招かぬよう付け加えておくが、私は、霊知的知識人 に対し、賢治研究に果たした功績の否定を目論んでいるわけではない。たとえば、ユング派の心理学者河合隼雄による 脱科学的 読解は、実に多くの示唆を含むもので、それは、精神科医福島章（『不思議の国の宮沢賢治』 日本教文社、96・8）の 科学的 読解や、「賢治は霊視者だった」と主張する桑原啓善『「銀河鉄道の夜」の真相』でくのぼる出版、96・6）の 非科学的 読解といったものと対照させることにより、一層明瞭になるはずだ。しかし、その上でなお私は、 宗教的欲求の時代 に生きるわれわれは、賢治作品および賢治その人を、常に各個人の内部で相対化させる作業を停止させてはならないと、生誕百年の喧騒の中で感じるのである。

第四章

「批評空間」における宮沢清六氏批判の言説

宮沢賢治の法華経信仰と国柱会

二〇〇一年六月一二日、宮沢賢治の令弟清六氏が亡くなられた。享年九七歳であった。初めて清六氏にお目にかかったのは、今から二五年ほど前のことである。お目にかかる時私はいつも恩師のつしろで小さくなっていたので、清六氏にとって私の存在は顔は知っていても名前が思い出せないといった程度だったはずである。そんな私ではあるが、「なめとこ山の熊」の自筆原稿を蔵から出して見せていただいたことや、文語詩「祭日（二）」の「アナロナビクナビ……」の一節を揮毫していただいたことなど、忘れがたい大切な思い出となって

いる。

そして、実は次のことがもつとも印象深いことなのだが、私がお話を伺っていた限りにおいて、清六氏は決して賢治作品の解釈を口にしよつとなさらなかったのである。私はそのような清六氏の態度を出来難い立派なことだと思っている。

一、「【共同討議】宮沢賢治をめぐる」の問題点

今回私が書くこうとするのは、清六氏に対する直接的な追悼の文章ではない。この機に、「批評空間」(14、平9)に掲載された「【共同討議】宮沢賢治をめぐる」における宮沢賢治・清六批判の根拠の幾つかを洗い直しておこうと考えているのである。討議者は関井光男、村井紀、吉田司、柄谷行人の四氏であった。

この討議は吉田司氏の『宮沢賢治殺人事件』(太田出版、平9)の刊行を契機として企画されたものである。吉田氏はその著書において、「デクノボーとしての賢治を再生させ、聖者伝説と化した『賢治の亡霊』を葬」ることを主張していたのであるが、討議に参加した他の三氏も、おおむね吉田氏の主張を肯定的に受け止める立場であった。この討議の問題点は、賢治 聖者伝説 に対する批判の矛先が遺族としての清六氏に向けられていたことにある。討議者たちの賢治研究の現在に対する苛立ちを理解できないわけではないが、その原因を遺族に向け痛快がる姿勢はあまりに短絡的であり、そのような方法では決して賢治 聖者伝説 を突き崩すことのできないことを知るべきだと考えている。

通常この種の言説は、読めば自ずとその真偽のほどが察せられる場合が多いのであるが、この討議の厄介なことは、一般の読者はもとより研究者でもつつかりするとその言説に乗せられてしまいそうになるほど専門的な資料を前提に展開されていることにある。特に関井光男氏の国柱会(賢治の所属した日蓮主義団体)に関する知識がそれに当たる。

二 賢治の法華経信仰と国柱会

関井氏の賢治批判を私なりにまとめてみると、賢治の法華経理解はすべて田中智学の国柱会から得たものであり、したがって賢治作品は国家主義的なファシズムを内包している、ということになる。関井氏のこのような賢治批判はむろん的外れなものでなく、現在の政治情勢を考えれば、今後の賢治研究にとってかなり重要な視点であると言つてよいだろう。しかし、関井氏の主張はあくまで仮説としての有効性にとどまるもので、その言説によって仮説が立証されたとは言いがたいと私は考えている。関井氏の仮説が実証されるまでには、それ相当の緻密な検証が要求されるのである。

たとえば、押野武志氏(『宮沢賢治の美学』翰林書房、平12)がすでに指摘しているように、賢治のテクストにはファシズムと反ファシズム両方の要素が含まれており、決して関井氏が主張するほど単純なものではない。また賢治の社会実践をみて、一時期「労働党」といったキリスト教的社会主義運動のシンパであったという事実からも窺えるように(参照 坂井健「宮沢賢治と社会主義運動 『労働党』を中心に」、「京都語文」第7号、平13) 国柱会会員であった事実と矛盾するような行動をとつてもいたのである。

もし賢治作品に今日的意義が認められるとするなら、それは賢治作品がすぐれてイデオロ

ギー的でありながら、同時に反イデオロギー的であるという点にあるように思う。それは、イデオロギーから離れていることを意味するのでなく、また、あるイデオロギーから別のイデオロギーに移りかわることでもない。一つのイデオロギーに抛りつつ、それを内部から相対化していくという方法がとられていくのである。だからこそ、異なるイデオロギーをもつ読者が同時に賢治作品に惹き込まれていくという今日の現象が生じたのであろう。このような稀有な作品を書き得たのが賢治という作家である。したがって、賢治が国柱会に所属する日蓮主義者であったという事実だけを強調し、当時の国粹主義者と同列に扱いこと足れりとする姿勢では、とつてい賢治文学の本質を明らかにすることはできないと考えるのである。

同様のことは、関井氏が専門の一つとする坂口安吾についても言えるのではないだろうか。安吾が天皇制や太平洋戦争を決して否定せず、むしろ肯定的であったことは明らかであるのに、われわれ読者が安吾の作品から天皇制や太平洋戦争を相対化するヒントを得られるのはなぜか。関井氏としても安吾を天皇主義者、戦争肯定論者として片付けられたら納得がいかないに違いない。

そこで以下、関井氏の主張の根拠をなす資料の疑問点や誤りを幾つか指摘し、今後のさらなる検討の材料として問題提起しておきたい。まず問題となる関井氏の発言を引用し、その後私の見解を述べる。

関井 賢治は田中智学の国柱会に入会したけれど、しだいに智学の日蓮主義から遠ざかったといわれている。しかし、賢治は国柱会を死ぬまで脱退していない。妹トシの遺骨も賢治の遺骨も国柱会の霊廟に分骨されている。それは消しようのない事実なんです。それにもかかわらず、法華経の「信仰は生涯変ることなく、法華文学の創作もつづいたが、国柱会に対しては入信当時とはしだいに変化し、冷却した。表面へは出さなかったが批判的であった」（堀尾青史『年譜宮沢賢治伝』）とされている。これは国柱会色を嫌った宮沢清六さんがでっち上げたことです。国柱会に入会してからの宮沢賢治の言説が、田中智学の日蓮主義の教学に影響されていることを指摘している論文があるにもかかわらず、その総体をつかめないでいるのは、その言説に惑わされているからです。

堀尾青史著『年譜宮沢賢治伝』（図書新聞社、昭41）には、確かに関井氏の指摘するように「信仰は生涯変ることなく、法華文学の創作もつづいたが、国柱会に対しては入信当時とはしだいに変化し、冷却した。表面へは出さなかったが批判的であった」と書かれている。改訂版として出された中公文庫（平3）でも変更はない。しかし、これはあくまで堀尾青史氏の仕事であり、それがなぜ「国柱会色を嫌った宮沢清六さん」の「でっち上げ」になるのか。根拠が示されておらず理解に苦しむと言わざるをえない。年譜作成者としての堀尾氏はその仕事の過程において宮沢家の協力を得たことは事実であろうが、宮沢家の影響を云々する前に、われわれは堀尾氏作成の年譜それ自体をきちんと検証する必要があるのではないか。

堀尾氏の記述には、「賢治は法華経の行者として、こうした国柱会とは離れ、ひたすら自己の信仰を全うした」ともあるように、賢治の法華経信仰を「国体中心主義」の国柱会から切り離そうとする意図が見える。しかし、賢治研究全体としては、上田哲『宮沢賢治 そ

の理想世界への道程 』(明治書院、昭60)による国柱会関連資料の調査や、小倉豊文『「雨ニモマケズ手帳」新考』(東京創元社、昭53)による、「雨ニモマケズ手帳」に見られる「妙行正軌範」(国柱会教義)の受容などにより、国柱会との関連が賢治晩年まで続いていたとする見方が常識となつていのである。堀尾年譜が賢治研究史上画期的な仕事であったことは間違いない。ただ、年譜の細かい記述に関しては堀尾氏個人の主観が加えられていることも事実であり、より客観的な年譜をどのように作成していくか、これが今は亡き堀尾氏により託された賢治研究の課題と考えるべきである。

次に、「妹トシの遺骨も賢治の遺骨も国柱会の霊廟に分骨されている。それは消しようのない事実なんですね」の発言に関してだが、「妹トシの遺骨」が「国柱会の霊廟に分骨」されていることは事実であるが、賢治の遺骨が国柱会の霊廟に分骨されている事実はない。妹トシが亡くなった時は賢治出京の翌年であるから、賢治がトシの遺骨を国柱会の霊廟に分骨したことに何の不可解さもないはずである。だが、もし賢治が遺言として国柱会の霊廟への分骨を希望しその通りになったとするなら、賢治と国柱会との深い関わりが実証されることになる。しかし、そのような事実はない。ただ、賢治の法名「真金院三不日賢善男子」は「遺族から国柱会(師子王文庫)に授与願が出され」た結果によるようで、国柱会の資料にその記録が残されていることが確認されている。このことは大橋富士子さんの『宮沢賢治まことの愛』(新世界社、平8)に記されている。大橋さんは国柱会第二代総裁・養主田中芳谷のご息女である。

戦後における清六氏と国柱会との関係を窺わせる資料として、同書によれば、昭和五七年九月、国柱会が「宮沢賢治居士五十回忌ならびに宮沢トシ善女満六十回忌の追善法要」を行つたとき、「遺骨に代る遺形として」賢治の「若き日護法の志に燃えて書いた」葉書を「清六氏から国柱会が頂い」て、「トシさんの眠る妙宗大霊廟」に、「納鎮」されたとのことである。もし関井氏の主張するように、清六氏が賢治と国柱会との関係を隠蔽しようとは画策していたとするなら、戦後三十七年経つた段階とはいえ、貴重な賢治の葉書を寄贈するだろうか。おそらく清六氏は、生前兄賢治の信奉した団体として、また姉トシの遺骨が分骨されている団体として、国柱会に対し遺族の務めを果たされたのだと思う。関井氏が清六氏のこのような行動自体を批判するのであれば、それはそれとして理解できないことはない。

関井 清六さんがつくつた十字屋書店版『宮澤賢治全集』の年譜を見ると、大正二年の「九月頃初めて妙法蓮華經を読み感激す。爾後同經典を座右に置き読誦す」とある。これがのちに「妙法蓮華經」から「法華經」に変えられるんですが、十七歳で「法華經」を理解できるはずがないと批判され、清六さんはこれを年譜から抹消している。賢治の「法華經」の知識は、大正三年にでた田中智学の『本化妙宗式目講義』や『日蓮聖人の教議』を読んで得たものです。それ以上じゃない。それに日蓮の遺文というのは、どれがほんものか、明治になってわからなかったです。／それを整理したのが田中智学なんです。だから、日蓮の遺文や御書を読むには、僧侶といえども智学の整理した『類纂高祖遺文録』(一九四二)を見るほかなかった。

『本化妙宗式目講義』は「講義録」の「録」が脱落。かつ「大正三年にでた」のではなく、明治三七〜四三年。『日蓮聖人の教議』の「議」は「義」の誤り。また、『類

纂高祖遺文録』の刊行は、「（一九四二）」でなく、一九一五年（大正四年）。

関井氏の言つように、十字屋書店版『宮澤賢治全集』の年譜の大正二年の項には、「九月頃初めて妙法蓮華經を読み感激す。爾後同經典を座右に置き読誦す」とある。だが、それに對し、「十七歳で『法華經』を理解できるはずがないと批判され、清六さんはこれを年譜から抹消している」と記した資料的根拠を、私は確認できないでいる。清六氏が十字屋書店全集の次に作つた年譜といえ、昭和三年から三四年にかけて刊行された筑摩版全集がそれに当たると考えられるはずである。年譜はその第一巻に宮沢清六編として収められているが、確かに大正二年の項には該当する記述はないものの、大正三年の項に「九月頃初めて妙法蓮華經を読み、爾後同經典を座右に置き読誦す」とある。とすれば、関井氏の発言の真意は、「感激す」を清六氏が「抹消している」ということにあるのだろうか。確かに、法華經を何の予備知識もなく初めて読みその場で「感激」したということになれば、それは信じがたいことではあるだろう。しかし、「爾後同經典を座右に置き読誦す」という記述が変更されなかった事実からすれば、賢治の法華經受容がこの時を契機にしたものであることは動きようがない。大正三年の段階で賢治がどのような仏教的素養を身につけていたのか、その辺りを詳しく検証する必要がある。ちなみに、大正二年での記述が大正三年に変えられたのは、賢治の読んだ法華經が島地大等編『漢和对照妙法蓮華經』（明治書院）であり、その刊行が大正三年八月であることが確認されたからである。

おそらく関井氏は、賢治が島地大等編の『漢和对照妙法蓮華經』を読み、それを契機に法華經を信仰するようになったとするなら、その段階ですでに国柱会関連の書物を読んでいたはずだ、という論理を組み立てようとしているのである。だからこそ、「賢治の『法華經』の知識は、大正三年にでた田中智学の『本化妙宗式目講義』や『日蓮聖人の教議』を読んで得たものです。それ以上じゃない」と発言したのである。盛岡高等農林時代（大正四、七年）の証言（小菅健吉「賢治と私（二）」、川原仁左エ門編著『宮沢賢治とその周辺』昭47）によれば、賢治は「法華經を大声で暗誦して皆を驚かせた」という。

では、盛岡高等農林時代の賢治は、関井氏の主張するように本当に田中智学の影響のもとに法華經を信仰していたのだろうか。田中智学の法華經解釈の特徴は他の宗派、宗教を認めない激しいものであったはずだが、当時の賢治は、願教寺の島地大等（「歎異鈔」などの講話）や盛岡教会のタッピング牧師（バイブル講義）、報恩寺の尾崎文英（参禅）を訪れたりもしていたことが知られている（同前書）。

それにしても、関井氏は何を根拠に大正三年当時、賢治が国柱会関連の書物を読んでいたと断定しているのだろう。賢治の国柱会への入会時期はほぼ明らかで、大正九年一二月の保阪嘉内宛書簡に「今度私は／国柱会信行部に入会しました。即ち最早私の身命は／日蓮聖人の御物です。従つて今や私は／田中智学先生の御命令の中に丈あるのです」と記されていることから、大正九年の秋を遡ることはない。それ以前の書簡、たとえば大正七年六月の保阪嘉内宛書簡は「南無妙法蓮華經」の題目が書簡末尾に二八回も書き添えられるという激越なものだが、それが、田中智学の影響にもとづくものと断定できるわけではない。

むしろ、賢治が国柱会に入会するという行動をとった背景として、それ以前の段階で国柱会の思想や活動に対する何らかの情報を得ていたことは確かで、問題はそれがいつ頃からであったかということになる。田中智学の影響が確実なものとしては、賢治が大正九年夏頃筆

写したと推定される「撰折御文・僧俗御判」が、田中智学の『本化撰折論』（国柱会産業株式会社書籍部、明30）を元に抜粋したものであるから、その時点において賢治が国柱会の思想を受け入れていたとは言い得るであろう。また、入会以前の段階で田中智学の講演を一度直接聞いていることが保阪宛書簡に記されており、それが賢治上京中の大正七年二月（八年三月（妹トシの看病）であつた可能性が高い）。

ではそれ以前はどうか。次に引用するのは村井紀氏の発言であるが氏は大正七年二月に発行された「アザリア」第五号に載せられた「復活の前」を取り上げ、それを田中智学の影響と見ている。

村井 初期の宮沢賢治、といつても二、三ですからもう立派な大人ですが、その頃に国柱会にいかれていて、田中智学の言うままにやるんだと言っているわけです。しかも、「私は剣で沼の中や便所にかくれて手を合わせる老人や女をブスリブスリと刺し殺し高く叫び泣きながらかけ足をする」（「復活の前」）、とジェノサイドを高唱している。

しかし、賢治の「復活の前」の言説を「その頃に国柱会にいかれていて」と断定できる根拠はどこにあるのだろうか。そのためには、少なくとも「ジェノサイド」（集団殺害）が国柱会特有の思想であるという実証的裏付けが必要であろう。そもそも村井氏の引用した箇所は、賢治の自己内省の箇所であり、「泣きながら」と書いた賢治の自我のありように注意しなければならない。「復活の前」全体を読めばすぐ理解できることであるが、そこで問われていることは 自分とは何か ということであり、私たちがそこから読み取れるのは 揺れ動く自我 というものである。そこに時代の子としての賢治の限界を見て批判することは当然の批評活動であるにしても、それを「田中智学の言うまま」であつたと断定する姿勢は、学問的でない。

関井氏の指摘する「日蓮の遺文や御書を読むには、僧侶といえども智学の整理した『類纂高祖遺文録』（一九四二）を見るほかなかった」にも確認しておきたいことがある。実は、賢治が所持していた御書は加藤文雅編輯校訂『日蓮聖人御遺文』（霊艮閣蔵版）であつた。初版は明治三十七年、大正一〇年の段階で訂正八版を数えている。斎藤文一氏（『宮沢賢治四次元論の展開』国文社、平3）は宮沢家の『日蓮聖人御遺文』を直接調査し、アンダーラインの書き込み箇所を報告している。『類纂高祖遺文録』の刊行が正しくは大正四年であることはすでに指摘しておいたが、霊艮閣蔵版『日蓮聖人御遺文』の存在は、賢治の法華経理解や日蓮理解が必ずしも国柱会とばかり結びつくものでないことの証拠となるだろう。

ここで私見をまとめるなら、大正三年の島地大等編『漢和对照妙法蓮華経』との出会いから、大正七年頃までの賢治の法華経信仰は、国柱会の影響下にあるとは断定できないこと。特に、大正三年の段階での法華経理解の前提として国柱会との関連を想定することは実証的に認められない、ということになる。

関井 たとえば、十文字屋版『宮沢賢治全集』に別巻がある。昭和一九年二月に初版が出ているんですが、戦後に二刷が出ている。これを読む研究者はいないようだけれど、これが大変おもしろいです。戦争中、宮沢賢治はどういうふう理解されたか、どん

なふうにもてはやされたかということが逐一「宮澤賢治年譜」（宮澤清六編）の中に書かれている。ところが戦後に作成された年表では、これがきれいに消されているんですね。吉田さんが『宮澤賢治殺人事件』で問題にしている『宮澤賢治名作選』（羽田書店）、これは昭和一二年に文部省推薦になつてゐる。『風の又三郎』（羽田書店）が文部省推薦になつたのは昭和一五年。なぜか羽田書店から刊行されたものだけが文部省推薦になつてゐる。そのほかに「宮澤賢治友の会」や賢治の会が何時どこで開催されたか、賢治の作品が何時どこの放送局でラジオ放送化され、映画化されたか、賢治の詩や童話が何時どこの会社でレコード化され、舞台化され、紙芝居化されたかを記載している。これを拾つていくと、宮澤賢治ブームが戦時下において起つてゐるということがわかる。特攻隊で戦死した学生が賢治の作品を読んでいるのは、当然だと思ふんですね。

「十文字屋版」は「十字屋版」の誤り。

関井氏が十字屋版『宮沢賢治全集』別巻、宮沢清六編「年譜」に見出した「戦争中、宮澤賢治はどういうふう理解されたか」ということは、確かに興味深いことである。賢治の作品が「戦時下」においても読まれたという特質、関井氏の文脈に即せば「戦時下」であるからこそ読まれたという特質は見落としてはならないことである。しかし、関井氏の「ところが戦後に作成された年表では、これがきれいに消されている」という言い回しには承服しがたいところがある。十字屋版『宮沢賢治全集』の初版（昭19・2）を確認したわけではないが、手元の第二版（昭27・7）も基本的に変化はないはずで、第二版においても関井氏の指摘する問題の箇所は全て残されている。そこで、「戦後に作成された年表」が、先に挙げた筑摩版全集（昭33・34）第一巻所収の宮沢清六編「年譜」であるとして、その年譜は十字屋版全集「年譜」とは異なり、賢治没年（昭和八年）までしか記されていないのである。では、関井氏の注目する没年以降の記述はどうなったのか。それは、同全集別巻『宮沢賢治研究』の「宮澤賢治研究文献目録」に移されたのである。「文献目録」の作成者は小倉豊文であった。したがって、「戦時下」における賢治作品受容の実態が隠蔽されたかどうかを確認するために、清六氏作成の戦前と戦後の年譜を比較することは意味のないことになる。ましてや、その責めを清六氏個人に帰着させることは全くの見当違いと言わざるをえない。

さて、問題の小倉豊文作成の「文献目録」であるが、結果としては、「戦時下」における賢治作品受容の実態を知る資料としてはやや不都合なものとなつた。「放送や演劇などになつた作品で、印刷化されていないものも省略した」というものであるからである。「文献目録」という編集方針からいえば当然のこと、この方針自体に何ら問題はない。ただ、幾つかの「戦時下」における賢治作品の受容を知る情報が抜け落ちることになつたことは残念なことである。関井氏のいわんとすることもこの辺りにあると考えられるので、政治色の濃い記述にかぎりここで確認しておくことにする。

昭和十四年（没後七年）

六月九日、「宮澤賢治名作選」は文部省推薦図書になる。

昭和十五年（没後八年）

三月十五日、羽田書店版「風の又三郎」文部省推薦となる。

十月十日、日活映画「風の又三郎」封切せられ、文部省推薦となり、文部大臣賞を受く。

昭和十六年（没後九年）

五月十五日、満州建国大学白系露人セリヨデキン氏は語学大会に於て「雨ニモマケズ」を朗読。

昭和十七年（没後十年）

一月十三日、東京日比谷公会堂に於ける、紀元二千六百年芸能祭に名倉隼氏作曲「雨ニモマケズ」が東京交声楽団により発表せらる。

四月、大政翼賛会選定、詩朗読レコードとして中村伸郎氏「雨ニモマケズ」を吹き込み、ビクター会社より発売。

昭和一七年四月の中村伸郎の「雨ニモマケズ」レコード吹き込みに関しては、小倉豊文「年譜」にも記載されているが、「大政翼賛会選」の記述が削られているので加えておいた。このように、十字屋版宮沢清六「年譜」から削られた項目を復元してみると、確かに賢治の作品、特に「雨ニモマケズ」が当時の国策に合致した作品として、政治的に積極的に取り上げられていたことがよく理解される。また、それ以外の作品、たとえば「風の又三郎」なども、他の作家の多くの作品が検閲、発禁を余儀なくされるなか、映画が作られたりラジオ放送されたりと、「戦時下」に広められていった事実が浮かび上がってくる。

なお、「戦時下」と関わりの深い項目である、

昭和十七年（没後十年）

三月十七日、大政翼賛会文化部編纂「時歌翼賛第二輯」に「雨ニモマケズ」を掲載。

「時歌翼賛第二輯」の「時歌」は「詩歌」の誤り。

などは、筑摩版（昭33〜34）「文献目録」にも記載されていることを確認しておく。小倉豊文作成の「文献目録」が、意図的に「戦時下」における賢治作品受容の実態を隠蔽したのかどうか判断する材料として必要と考えるからである。

最後に、『校本宮沢賢治全集』（昭48〜52）により明らかにされた賢治作品の全貌は、今なお多くの謎と新鮮な驚きをわれわれに与えつづけていることを強調しておきたい。作品の全貌を目の当たりにしたとき、われわれは、賢治作品が「戦時下」における受容の問題を遙かに超えた謎であることを知るのである。周知のことではあるが、『校本宮沢賢治全集』は現在、さらに精密な校訂を経て『新校本宮沢賢治全集』として刊行中である。確かに、『共同討議』宮沢賢治をめぐる「が明らかにしたように、現在の『賢治ブーム』を形成している一部には徹底的に検証を加えねばならないご都合主義が含まれてはいるだろう。だからといって、賢治批判が喝采される道理にはならない。賢治批判もまた等しく検証されねばならないと考えるのである。

